



かけがえのない

大学生活

国際基幹教育機構・教授

新ヶ江 章友

厳しい受験を終えて大阪公立大学へ入学された皆さん、入学おめでとうございます。これからの貴重な大学生活を、ぜひ充実したものにしていただきたいと思います。

高校と予備校時代

実は昨年、私の地元で、自分が卒業した高校の同窓会がありました。高校の同級生と再会したのは30年ぶりです。顔を見ても最初は思い出せず、名前を聞いてだんだん当時の記憶がよみがえってくるという不思議な体験をしました。私は、高校時代にあまり良い思い出がなく、どちらかというと勉強がとても辛かったという思い出しがあります。私の通っていた高校は朝の7時半から毎日補習があり、週に1回、火曜日の朝には英語が数学のテストがありました。授業の予習や宿題の量は放課後の勉強だけではこなせないほど多く、毎日睡眠不足でした。競争、競争の毎日で、要領よく勉強していい成績を出している同級生が、心底うらやましいと思っていました。

大阪公立大学

大学での幅広い学びの道しるべ

No. 3

Un roseau

新入生の皆さんに向けて、先生方からご自身の専門分野やご経験に基づき「大学で学ぶ意義や面白さ」について語っていただいています。多彩な学問の世界に触れて、あなたの大阪公立大学での学びの可能性を広げてください!

タイトル“Un roseau(アン ロゾ)” —— 一本の葦 —— について

B.Pascal (1623-1662) は、一人一人の人間の存在を一本の葦に例えました。葦は河岸や湖岸などの水辺に生える、ススキに似た植物です。その存在は真にはかなく、人も同様で、その存在はきわめてはかないものであると…。しかし、Pascalは言うのです。

L'homme n'est qu'un roseau, le plus faible de la nature, mais c'est un roseau pensant.
(ロム・ネ・カン・ロゾ、ル・プリユ・フェーブル・ドウ・ラ・ナチュール、メ・セタン・ロゾ・パンサン)

—— 人は一本の葦に過ぎない。自然界でもっとも弱いものだ。しかしそれは考える葦だ。 ——

人間は水辺の一本の葦のようにはかない存在ではあるのだが、考える(思考する、思想する)という行為によって有形の現象の世界(形而下の世界)のみならず、その奥にある広い広い世界(形而上の世界)を知ることができる存在なのだ。Un roseauとは「あなた」のことなのです。



大学カケル好奇心

国際基幹教育機構・准教授

桑原 希世子



それはアルバイトから始まった

一浪して入学した大学1年生の時である。語学が同じクラスだった生物学科の友達が「コカワケンでバイトあんねんけど、一緒にせえへん?」と声をかけてきた。友達と一緒に理学部の4階にあった研究室に行くと、植物化石を研究する人たちがここにこして迎えてくれた。コカワケンというのは粉川研究室のことで、穏やかで飄々とした風貌の粉川昭平先生のもと、植物の種や材、花粉化石の研究が行われていた。

明るい研究室の壁面の棚には学術雑誌がびっしりと並び、産地名の書かれたクリム色のモロブタが大量に積み重なっていた。あちこちにさまざまな植物の種や実が置かれ、大きなまつぼっくりが飾られていたり、フォックスフェイスという面白い形の黄色い実が活けてあったりもした。化石保存の薬品だったのだからか、粉川研に行く独特の理科系のニオイがした。赤い蓋のプラスチックの標本ケースが並んでいることなど、いかにも研究室という感じでワクワクした。

「これはそうめんかぼちゃ。ゆでるとそうめんみたいになります。」ヒマラヤのチャンチンモドキ

今考えると、私はとても要領の悪い高校生だったと思います。授業の内容を理解することよりも、ノートをきれいに取することに余計な努力を使ったりする高校生でした。でも、そのような要領の悪さよりも深刻だったのは、「こんな勉強、何の意味があるんだろう」ということを常に考えてしまうことでした。ただ闇雲に暗記をすることがとても苦手で、なんでこんなこと覚えなくちゃいけないんだろう、なんでこんなこと勉強しなくちゃいけないんだろう、とそんなことばかり考えていたため、なかなか肝心の受験勉強に手がつかないのです。その結果、結局浪人することになってしまいました。

ただ逆に、私は浪人して初めて勉強をすることの面白さを知りました。特に、世界史や現代文、小論文の勉強が楽しかったのを覚えています。「知的好奇心」が刺激された、ということ初めて予備校で経験しました（もちろん高校の授業でも知的好奇心が刺激される授業はあったのですが）。

大学入学後

大学入学までに予備校での寄り道をしたことは、その後の私の学問と向き合う姿勢の基盤を作っていたのだと、今となっては思えます。知的好奇心は、大学に入ってからますます旺盛となっていました。とにかく、大学の授業がとても面白く、自分からどんどん関心のある領域の本を読んだり、授業を取ったりしました。毎年4月に大学のシラバスを受け取り、そのシラバスをもとに授業のスケジュールを組み立てることがとても楽

しみでした。私が在学していた大学では学部の枠を超えて、自由に授業を履修することができました。私は文学部系の大学生でしたが、政治学や国際関係論などの社会科学系の授業をとったり、大学院生になってからは医学研究科の授業も取り、医学部の先生方と医療人類学の文献の自主読書会を開催したりもしていました（でも実は、体育の授業が一番面白かったです。私はとても運動音痴なのですが、その大学の体育の授業はそういう学生にも楽しめる授業をたくさん開講していました）。

ところで、大学の授業で特に知的好奇心をそそられたのが、哲学の授業でした。大学1年の時に「現代思想入門」という授業があり、そこで『ソクラテスの弁明』というテキストを読みました。このテキストは西洋哲学の源流にあたるもので、哲学をすることがどういうことか（「知を愛する」ということ）を学びました。その後、よく分からないにもかかわらず、デカルト、フッサール、フーコー、ガダマーなどのテキストも授業で読みました。今考えると、内容はよく理解できていなかったのですが、何か自分がこれから生きていくための指針となるようなものを感じたのかもしれないと思います。

哲学の中でも特に面白かったのが、科学哲学でした。化学物理学者であり、かつ哲学者でもあったマイケル・ポラニーという人が書いた『自由の論理』というテキストを読みながら、科学的真理がどのように発見されていくのか、科学者は実験室でどのようなことを行っているのか、科学の世界がどのように機能しているのか

の種ですよ。」などと、珍しい植物に行くたびに教えてもらった。「化石をやるなら進化やろ。」と言われたことも記憶に残った。粉川研のアルバイトは、遺跡から発掘された植物化石のふるいわけの手伝いであつたが、時には野外調査の補助もあり、遺跡調査にも連れて行ってもらった。初めて研究の世界に関われることが嬉しかった。

それから、学内外で研究周辺のいろんなアルバイトをした。放課後は地球化学の鶴巻研に行き、分析装置に水の試料をセットした。学会があるときは、受付や書籍の販売などの仕事があつた。3年生の時、放散虫という微化石の研究補助をした。

放散虫との出会い

放散虫は、海棲のプランクトンで単細胞生物。ガラスの殻を持つので化石になりやすい。ゼヒネットで放散虫を検索してほしい。芸術品のような、繊細で美しい多様な形の画像が表示される。

1980年代、日本の地球科学界は「放散虫革命」というブームに沸いており、大阪市立大学基盤地質研究室は、熱気に満ちていた。日本の基盤岩の年代を放散虫化石で調べると、古生代と思われる地層が中生代であることが明らかになつてきて、まさに歴史が書き換わる科学革命の現場だったのである。背景には①1970年代にプレートテクトニクス論（地震、火山、造山運動などの現象をプレート運動で統一的に説明する理論）が確立したこと、②硬い岩石から微化石を取り出す方法の開発、③電子顕微鏡の普及があつた。研究室の人たちが理学部

1階の少々暗い研究室で、日々成果を上げるのにしのぎを削っていた。

アルバイトの私は、放散虫抽出の方法から学んでいった。野外調査で集められた岩石をフツ酸という薬品で溶かす。フツ酸は毒物なのでドラフトチャンパーという排気装置のなかでの作業である。ガラスは溶けてしまうため、プラスチックのビーカーを使う。岩石を一昼夜フツ酸につけ、溶け残った残渣を目の細かいふるいを通して集める。そしてシャーレに広げ、実体顕微鏡で探す。放散虫化石は1ミリにも満たないが、丸いもの、三角のもの、棘のあるもの、さまざまな形をしている。特徴的な形が見つかれば細い筆を使って拾い上げる。そして電子顕微鏡で写真を撮る。誰も知らない種類の化石が見つかり、記載論文（新種の学名、タイプ標本、形態的特徴などを記した論文）が書かれていくさまを目の当たりにした。なんだかこれはすごい。

ハンマーと顕微鏡

放散虫研究の勢いにすっかり心が奪われた私は、八尾昭先生の指導を仰ぐことにした。卒論のテーマはペルム紀の放散虫化石層序の再確認。野外調査をし、放散虫化石の詰まった地層を一枚ずつ採集する。地層の順に化石の種類が変わっていく、放散虫化石が時代を示す標準化石であることが実感できた。私が出会った放散虫は、人形のような愛嬌のある可愛い形をしていた。大学院で続きをやりたい。学会発表もしてみたい。

それからずっと、放散虫化石に関わり続けることになる。放散虫はいろんなことを教えてくれ、世界を広げてくれた。

かを学びました。このテキストを読んで、大学で学ぶということがそもそもどういうことなのか、より根源的なところで理解できるようになったのだと思います。特に、私の人生に決定的な影響を与えたのが、フランスの哲学者のミシェル・フーコーでした。フーコーの本は最も初期のものから晩年のものまで目を通しました。当時は内容もよく分からなかったのですが、フーコーについて書かれた入門書や伝記なども含め、あらゆるものを貪欲に読もうとしていました。私が大学生になるまでに抱えていた「モヤモヤ」を、フーコーが何か言語化しているのではないかと思ったのです。

生き方を見つけるための学び

私は思春期の頃から、自分がこれから社会に適応して生きていけるのだろうか、という漠然とした悩みを抱えていました。高校時代を振り返ると、二十歳以降の自分が全く想像できなかつたし、そもそもその「悩みのようなもの」の正体も自分自身でよくつかめていなかつたのです。ただなんとなく絶望的な不安しかありませんでした。

私が哲学という学問に一番興味を持ったのは、それが知ることを通してどのようにならざるのかを真剣に考える学問だったからだだと思います。先ほど書いた『ソクラテスの弁明』には、知ることと生きることの関係について書かれています。大学生の私が哲学に強く惹かれたのは、自分のこれからの生き方を探そうとしていたからだだと思います。

思春期から大人になる段階では、誰も

が多かれ少なかれ様々な悩みを抱えるものです。その悩みも、すぐに解決できそうなものから、なかなか自分一人の力で解決できそうもないものまで多様です。自分で解決できる力を持っている人もいれば、傷つきの怖くて向き合えない人もいるかもしれません。

でも私がこれから大学生になる皆さんに伝えたいのは、悩みをネガティブなものではなく、自分自身を成長させる糧として受け入れてほしいということ。あなたの悩みを解決する手がかりが、大学で学ぶ知の中にあるのであれば、その悩みが大きければ大きいほど、得られるものも大きなものになります。そして、あなたの得た知は、研究を続けていくことで他の人にも影響を与える知に発展していくかもしれません。

大学にあるのは知だけではありません。同級生、教員、事務の皆さん、いろんな人が大学にはいます。大学で得られる最もかけがえのないものは、これらの人です。ぜひ学部の枠を超えて、色々な人と交流する機会をもってください。きっとあなたの今後の人生を支えてくれる人が見つかるはず。皆さんの悩み多き大学生生活を、心から応援したいと思います。ようこそ、大阪公立大学へ！

新ヶ江 章友(しんがえあきとも)

1975年生まれ

2006年筑波大学大学院人文社会科学研究所修了・博士(学術)

現職・国際基幹教育機構・教授

専攻分野・文化人類学、社会学、クイア・スタディーズ

担当科目・クイア・スタディーズ、平和と人権

もしも大学生に戻れたら？

映画「バック・トゥ・ザ・フューチャー」

野外調査でいろんな場所に行けるのは、地質学の特典でもある。国内外の学会では、魅力あふれる人たちに会えた。研究者コミュニティには、女性研究者も多い。研究者同士はライバルでもあるのだが、同じ化石を研究している連帯感もある。新しい論文に感心することもあれば、先を越されて悔しい思いをすることも。研究には苦勞も厳しさもあるのだが、岩石を溶かして残渣に化石が含まれているかどうか、顕微鏡に向かう時間がなんとも楽しい。学生時代はそれこそ朝から晩まで顕微鏡を見ていた。綺麗な化石が見つかるとうれやがる。放散虫をやつてよかつた。

のように、大学生だった時に戻れたらと考えてみた。若い自分にメッセージをおくるとしたら、何を言うか。「昼ごはんはおやつちやうよ。菓子パンあかん、栄養考えて食べんと」「運動して体力つけなさい」「ドラクエいいけど、夜は寝なさい」「英語はもっとやつたほうが」なんて、お母さんみたいなことを言いたくなる。でも若い私は、人の言うこと聞かないだらうな。放散虫は選んで正解だつたと思うので、サムズアップサインを。でも、もっと勉強して論文もしっかり読んでほしい。

ところで、「バック・トゥ・ザ・フューチャー」は、大学生に通じるのだろうか。タイムマシンになったデロリアンで過去と現在をつなぐスピルバーグのSF映画。第1作で主人公が過去にもどつたのは30年前の設定だつた。おつとデロリアンに乗つても、私は大学生には戻れなかつた。

そして、贈る言葉

韓国映画「怪しい彼女」はどうでしょう？ 70歳のおばあさんが20歳になって、昔でさなかつたことに挑戦するお話。2025年に20歳に戻れたら、やつぱり私は放散虫をしたい。ちなみに主役のシムウンギョンは、素晴らしい演技力の女優さんだ。韓国ドラマも私の好きなものの一つで、好きなものがたくさんあると間違いなく人生は楽しい。

大学一年生となられたあなた、自由に好きなことに挑戦でき、さまざまな経験が待っている。授業は興味のある科目を選ぶことができる。新しい友達との出会いがある。部活もよし、恋愛も、アルバイトも、国内外の旅行も良い。思いっきり、さまざまなことにチャレンジしてほしい。よければ中百舌鳥キャンパスのB3棟に放散虫も見に来てください。

時間はたくさんあるようで、あつという間に過ぎていく。どうぞ時間を大事に。食事、運動、睡眠で、体を大事にすることを忘れずに。英語は身につけておいたほうがこれからの選択肢が広がる。大学生生活を楽しんで、好きなことをたくさん見つけてください。これからの大学生活が輝かしい時間になりますように、心からお祝いいたします。

桑原 希世子(くわはらきよこ)

1964年生まれ

1996年大阪市立大学大学院理学研究科博士後期課程修了・博士(理学)

現職・職階・国際基幹教育機構・准教授

専攻分野・地質・古生物学

担当科目・地球学への招待、地球学入門など